

原告団

遺族・CO裁
判、災害責任
追及、特集号
第百三十一号

原告団レポート

遺族——
藤本清女さん

病床で慟哭

「病気で入院中のあなたに思
い出させて悪いですが、やがてご
主人の命もあつてくることがす
から、ぜひお話しを聞かせてくだ
さい。ご主人さんは、いったいど
んなお人柄でしたか」

その言葉がまた終らぬうちだつ
た。彼女はいきなり、自分が座つ
ているベッドのなかに身を投げた
かと思ふ泣き出した。やせ細つ
た体を打ちふるわせ、両の手を
で自分の頭を押さえているところ
を見ると、よほど懸命に、泣くの
をこらえているのだろう。それで
も、顔とフツンの間からククッ
クッと、押し殺されたよう涙が洩
れてくるといった。

悪性胃腫瘍

藤本さんは大正十二年一月二十



写真は、入院中の藤本さんをたずねてきた同じ遺族仲間
の永江美由紀さんとつしよに。訪問はよほどうれ
しかったようで、からりと晴れた表情だった。

今も思い出せば泣く

一日も早く、裁判勝利の報告を亡夫の前に

やっと悪性胃しゅ瘍を克服

感なく発症した。野添社宅に住ん
でいたが、ヘルメットを冠りなが
ら毎日ホッパへ。「大方兵隊生
活のなかでできたえごまれたのでし
ょう」と藤本さんはいふが、「男
勤者である限り、こんな無茶苦茶
な首切りが許されるか」、が亡夫
正己さんの口癖だった。

子ども二人

家族は、子どもが二人。女はか
りて長女の喜三子さんが二十二
年九月十五日、次女の澄子さんが二
十五年九月十四日に生まれた。
三井の手で父親正己さんを奪わ
れたとき、長女の喜三子さんが高
校一年生で、次女の澄子さんが中
学一年生だった。頭脳に恵まれ、
ともに県立高校へ学ぶことがで
きた。揃って何回となく学級委員も
子ばかり二人、あとに残してでか

記事について

本紙前号「原告団」の四
ページに、写真でご紹介しま
した遺族「浜村ミサオさん」に
ついての説明のなかで、「亡
夫」としましたのは実は息子
さんの誤りでした。訂正して
おわびいたします。
また同じ「原告団」の三
ページの「原告団レポート」
で紹介しました、CO患者
の谷崎次義さんの生年月日
が、記事のなかでは大正十二
年十一月十五日となつてい
るのに、谷崎さんが小学校在学
中に、高等科の二年のとき熊本
県教育会八代支会会長から贈ら
れた「学業優秀」に対する
褒状には、同年の十月十
五日となつております。これは
あくまでも記事の方が正しい
のであって、褒状の方が何か
の理由から誤記されているの
です。どうか、その旨ご了承
くださるようお願いいたしま
す。——編集部

「体が弱るといふ主人のことが
思い出されてきて、泣いてしま
います。こゝろをさげすんでい
たいです。」

煩悩も深く

亡夫の名は正己さん。大正七年
十一月十九日生まれたから、大爆
発まで命を奪われたときは四十歳だ
った。今生きていればちょうど六
十歳のはず。だとすれば今頃は孫
など遊ばせながら、きつと定年退
社に出動したとき、もはや
痛に負け一年ほど会社を休む。再
度会社に出動したときは、もはや

三池闘争で

そんな正己さんだったが、あの
三池闘争のときはほんの強さを遺
いわんばかりに兵隊へ。日支
いざいざのころ、「待っていた」と
いふわんばかりに兵隊へ。日支

イトコ同志

藤本さんが正己さんと結ばれた
のは、昭和二十二年の十月十一
日。藤本さんが二十三歳、正己さ
んが二十八歳のときだった。
三池炭鉱に入社したのは、昭和
十六年頃。勤務箇所は坑外の建設
課だった。身につけた大工職人の
技能を生かしたのだ。

抗議に上京

忘れもしない、これは夫——正
己さんの命を奪われた直後の、三
十八年の師走のことだった。余り
にも大きかった悲しみに打ちひし
がれ、残された子どもを親たちと
これからどう生きていけばよいの
か、心がまったく混乱していた七
人の妻たちが、遺族を代表する形
で上京した。ともあれ、大災害
をひき起こしては、杖も柱も
頼む自分たちの夫の命を奪った三
井鉱山に対して、働く者の権利と
して怒りの抗議を行い、かたがた
その頭すでに組合の名で出してい
た遺族の要求（なかに百万円とい
う弔慰金の要求が含まれていた）
について、会社が災害をひき起
こした責任からも、せめて心よく
こたえてくれることを、重ねて要
求するたためだった。実は、その七
人のなかに、藤本さんも加わつて
いたのである。

資本は冷酷

そこは東京の三井鉱山本社。そ
こで見つけられたのは、死んだ
あととまともな労働者を虫ケラ扱
いにする資本というものの正体だ
った。彼らは遺族たちが「たとえ
三井鉱山の屋根のうらえにペン
草がはえても、遺族や患者のめ
んどろは必ず見ます」といつてく
れた会社を信じて出した要求を、
何かと口実をつけては冷酷にも踏
みにじつたのである。

願いは一つ

あれから十五年たつ。住まいも
今は、野添社宅から大牟田市白銀
辻四九八—四に移した。が、つ
いに矢も盾もなくなった悪性の胃
腫瘍におかれ、倒れたのであ
る。夫をうしなした者のみがかつ
悲しき、心細さに耐えながらの療
養生生活。「今の願いは——？」と
聞くのに、彼女は答えた。

「裁判に勝つて、一日も早くお
父さんに勝利の報告をすることだ
から、これほど皮肉なこともな
けです」

故藤本正己さんの遺族、どうか
妻の清女さんのうらえに私の加護
の力があつたらうと願っています。